

## 「キラキラ星」のメロディによる中国語の声調指導研究\*\*

俞 稔生、郭 麗影\*\*\*

A Study of the Tone Guidance of Chinese by Means of the Melody of  
“Twinkle, Twinkle, Little Star (Also Known as Kira Kira Boshi in Japan)”

Rensheng YU、Guo LIYING\*\*

## キーワード：

キラキラ星、メロディ、中国語、声調、教授法

## 概要：

本研究は「ド・ソ」メロディ声調指導法により、初めて見る四字熟語を短時間で正確に発音することができるかどうかについて検証する。

「ド・ソ」メロディ声調指導法とは、「キラキラ星」の出だし「ド・ド・ソ・ソ／ララソ」を参考に、最初の4音節の「ドとソ」を入れ替えて発音することにより、第一、第三声により構成された四音節の習得を目指すものである。

「キラキラ星」の出だしの「ド」と「ソ」のパターンを入れ替えることにより、高・低調域が構築され、様々な声調の組み合わせを習得することが可能となるのではないかと。また、声調の組み合わせを習得したならば、声調記号の下にある子音・母音の組み合わせがどんなに変わっても、同じ声調パターンなら、同じ要領で発音すると、安定した声調を定着させることが可能となるのではないかと。という二つの仮説を立て、実験を行い、その結果に基づいてこの二つの仮説を検証した。

「ド・ソ」メロディ声調指導法は声調の組み合わせをメロディにしたからこそ、替え歌感覚で声調指導ができ、高い中国語発音力を実現する可能性を示唆するものである。

## 1. はじめに

日本中国語学会九州支部2008年度例会で、郭麗影の論文発表の司会を担当した。テーマは「中国語声調指導における実践ーソ・ドー二線譜四度音感の活用という視線から」で、その内容はピアノ中央付近の鍵盤ドと、それより3つ左のソとの高低の区別だけで、中国語の二音節組み合わせの発音を指導する実験研究だった。実に独創的な発想

であったし、今後の更なる進展と指導法の確立を予感させる発表でもあった。

それ以来、互いに発音指導に関して交流してきたが、近年、新しく「ド・ソ」メロディ声調指導法を考案したとのことで、実験モニターを増やすためのお手伝いもさせてもらった。この度、長崎ウエスレヤン大学で「中国語発音」の授業一コマを使い、メロディ声調指導法を教授していただく機会を得た。

## 2. 研究の背景

声調の「高・低・昇・降」<sup>i</sup>を「ド(低)→ソ(高)」という五度音程で表示すると、ド(低)「ā」はソ(高)「ǎ」の反対で、「ǎ」の起点であり、「à」の終点である。

「キラキラ星」のメロディは日本では老若男女を問わず広く知られている。その「キラキラ星」の出だし「ド・ド・ソ・ソ／ララソ」で作成したメロディは四つの声調の組み合わせとなる。たとえば、「ド・ド・ソ・ソ／ララソ」を「ド・ソ・ド・ソ／ララソ」にすれば、声調の「高・低・昇・降」の練習となる。

ここで、次の二点を述べておかなければならない。第一点は、「ド(低)・ソ(高)」二つの音符には高低差があり、「昇・降」よりシンプルであるため学習者に受け入れやすいこと。二点目は、調域の高低差をあえて五度と大きめに設定することで学習者がより区別しやすくなることである。

「ド・ソ」メロディ声調指導法はなじみのある「キラキラ星」の出だし「ド・ド・ソ・ソ／ララソ」を参考に、最初の4音節の「ドとソ」を入れ替えて発音する(aやmaも使用)ことにより、高・低調域の構築及び第一、第三声により構成された四音節の習得を目指すものである。

\* Received November 18, 2013

\*\* 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 外国語学科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

\*\*\* Guo Liying

### 3. 研究の目的

「ド・ソ」メロディ声調指導法により、初めて見る四字熟語を短時間で正確に発音することができるかどうかについて検証する。

### 4. 仮説

中国語発音指導にメロディの導入を勧めることはできない。なぜなら、メロディは声調よりはるかに強く、声調習得の邪魔になるからだ。

しかし、「キラキラ星」のメロディ声調指導法では、声調の組み合わせをメロディにしたので、メロディであり、声調の組み合わせでもある。だから、「キラキラ星」の出だしの「ド」と「ソ」のパターンを入れ替えることにより、高・低調域が相対的に構築され、様々な声調の組み合わせを習得することが可能となるのではないか。＜仮説1＞

声調の組み合わせを習得したならば、声調記号の下にある子音・母音の組み合わせがどんなに変わっても、同じ声調パターンなら、同じ要領で発音すると、安定した声調を定着させることが可能となるのではないか。＜仮説2＞

## 5. 方法

### 5.1 被験者

長崎ウエスレヤン大学外国語学科の学生男女2名で、いずれも中国語は未経験。今年度「中国語発音」を履修した。実験日時までに授業を4回受講し、母音、子音と声調は教授済だが、2音節の声調の組み合わせを教授途中。鼻母音（nとng）やアル化音などは未教授。二人とも教師のあとについて正しく発音することができるが、個々に発音させるとおぼつかない。模倣はできてまだ習得していない段階。

### 5.2 実験日時

2013年5月17日

### 5.3 実験

まず、「キラキラ星」の出だし「ド・ド・ソ・ソ／ララソ」（右側のララソは～と表記）を参考にして、教師が最初の4音節を「ドとソ」を入れ替えて発音する（aやmaも使用）。<sup>ii</sup>

つぎに、それを聞いた被験者が四字熟語のピンインでハミングする。

1. ā ā ā ā ~

→ 你吃香蕉（nǐ chī xiāngjiāo）

→ 我喝咖啡（wǒ hē kāfēi）

2. ソ ソ ド ソ ~

→ 发音好听（fāyīn hǎotīng）

→ 飞机起飞（fēijī qǐfēi）

3. mā mā mā mā ~

→ 他说英语（tā shuō yīngyǔ）

→ 抽烟喝酒（chōuyān hējiǔ）

4. ā ā ā ā ~

→ 她想开车（tā xiǎng kāichē）

→ 他有公司（tā yǒu gōngsī）

5. ソ ド ソ ド ~

→ 他有铅笔（tā yǒu qiānbǐ）

→ 她买香水（tā mǎi xiāngshuǐ）

6. mā mā mā mā ~

→ 公安机关（gōngān jīguān）

→ 初中高中（chūzhōng gāozhōng）

7. ド ソ ソ ド ~

→ 每天开始（měitiān kāishǐ）

→ 北京香港（Běijīng Xiānggǎng）

8. mǎ mā mǎ mā ~

→ 我家有猫（wǒ jiā yǒu māo）

→ 很多老师（hěn duō lǎoshī）

### 5.4 評価基準

1. 声調が一つでも間違ったら「×」とする。

2. 第三声の位置は語尾であっても、半三声で発音する。<sup>iii</sup>

3. 母音の多少のブレは許容する。＜例＞…「吃」「喝」「可」「熊」をそれぞれ「qi」「ha」「ka」「xing」と発音したとしても「○」とする。

## 6. 結果

四字熟語を発音するのに何のヒントもなかったので始め多少戸惑った様子で、声が小さかったり、時間がかかったりしたが、ハミングするのに慣れてくると順調にいった。

また、二種類の四字熟語の二番目の方が最初の熟語よりスムーズに発音できた。

一人の学生に5. の ソ ド ソ ド の二番目のドが下がりきっていない現象があったが、訂正後は良くなった。それを含めて正解率は90～95%くらいに達した。

## 7. 考察

実験で、初めに「キラキラ星」の出だしの「ド」と「ソ」のパターンを入れ替えて歌う練習をしたことにより、高・低調域が相対的に構築され、第一、第三声により構成された様々な声調の組み合わせの四字熟語を正しく発音することがで

きるようになり、＜仮説1＞は検証された。

また、二種類の四字熟語の二番目の方が最初の熟語よりスムーズに発音できたということは、声調の組み合わせを習得したならば、声調記号の下にある子音・母音の組み合わせがどんなに変わっても、同じ声調パターンなら、同じ要領で発音すると、安定した声調を定着させることが可能となるという＜仮説2＞も検証されたといえる。このことは、声調の組み合わせをメロディにしたからこそ、替え歌感覚で声調指導ができ、高い中国語発音力を実現する可能性を示唆するものである。

## 8. 今後の課題

今回の実験授業では対象人数がわずか二人であったことで、「ド・ソ」メロディ声調指導法の有効性が確実に立証されたのかとの疑問が出てくるかもしれない。しかし、郭麗影が熊本大学で、毎年10名の大学生を被験者として、CDを使用した効果確認実験を行い、高い正解率のデータを蓄積しており、今回の実験授業の有効性はカバーされているのではないかと考えられる。

また、今回の長崎ウエスレヤン大学での実験授業は一コマだけだった関係上、第一、第三声により構成された四音節の声調指導だけに終わり、第二、第四声を交えた四音節の声調指導は時間的に無理であった。第一、第三声により構成された声調の組み合わせの練習により、高・低調域が構築されていれば、第二、第四声を交えても、四字熟語を正しく発音することができるかについては今後の課題とする。

## 注

- <sup>i</sup> 本研究では、声調の説明において、従来の「高平・中昇・低降昇・高降」より、特徴的で分かりやすい「高・低・昇・降」で解説する。
- <sup>ii</sup> 今回は郭麗影が録音したCDは使用せず、生の音声で実施した。
- <sup>iii</sup> 第三声は、まず半三声を定着させてから、全三声を教授する。

